

# Philosophia perennis とびう概念の歴史と意義に関する考察

リアナ・トルファシユ

「永遠の哲学」(philosophia perennis)とは、とりわけ二十世紀の前半広く用いられるようになった、哲学的かつ宗教的な概念である。しかし、「永遠の哲学」という用語が初めて登場したのは、ルネサンス期の哲学者にして神学者でもある

アゴステイノ・ステウコ(Agostino Steuco)が一五四〇年に出版した『永遠の哲学について』(De perenni philosophia)という書物の題名においてであったようだ。この書物は、出版されて百年以上の間様々な哲学的・宗教的な信念を抱く多くの思想家たちによって高く評価されたが、後世紀に書物自体も、またそれが含む多くの思想も忘れられるようになった。ところで、二十世紀の初め頃、「永遠の哲学」の概念は突然再登場し、特に半世紀ぐらいにわたって自分たちの思想を「永遠の哲学」として示すような様々な思想家や哲学および宗教上の流派によって用いられるようになった。その明確な意味については一致した見解が存在しないのだが、一般的に「ある主題が哲学の歴史の中を絶えず流れ続けており、ま

た、ある不朽にして永続的な真理を、歴史上のいかなる時代における哲学書の中にも見出すことが出来る」という内容を指すものとして理解されている。

現在、「永遠の哲学」を代表すると自ら主張している思想上の流派のうちで最も有力なのは、ルネ・ゲノン、アーナンダ・クマールアスワミ、フリッチョフ・シュオンなどを中心として前世紀の三十年代頃に登場した、一般に「永遠の哲学派」(perennial philosophy school)、あるいは「伝統主義派」(Traditionalist school)と呼ばれているものである。後に、この派の支持者たちは「永遠の哲学」を主張する他の人々から自らを区別するため、「永遠の知恵」(sophia perennis)や「永遠の宗教」(religio perennis)という概念について語り出した。すでに二十世紀の中頃から、ハインリヒ・ツィマー、ミルチャ・エリアーデ、ステラ・クラムリッシュ、アンリ・コルバン、ジルベール・デュラン、アントワーヌ・フェーヴルなどといった学者たちが、何らかの形でそれによる影響を

受けていた。また過去数十年の間に、とりわけアメリカやイギリスにおいて、比較宗教学や宗教多元主義について研究している学者たちの永遠の哲学派に対する感心が次第に大きくなって来た。こうした学者たちの間には、同学派の支持者であることを公然と認めている者もいる。<sup>3)</sup>

いずれにせよ、永遠の哲学派の思想とは宗教的なものであり、また、その思想は宗教学の領域にまで影響を広げて来ている。さらに加えて、現在では「永遠の哲学」という概念それ自体が、宗教的な意味合いではほとんどこの学派のみに關して用いられているため、宗教学は同学派の主張について、より良く知る必要があるように思われる。一方で、「永遠の哲学」という概念自体が、それ本来のステウコの用法から現代における同学派の用法に至るまでに一体どのような歴史的变化の過程を辿って来たのかを明らかにする必要があるだろう。

本稿の目的は以下の通りである。

- 一、現代における永遠の哲学派の思想に関し、その根本的な主張を要約すること。
- 二、「永遠の哲学」という概念や、それに相当する他の表現の歴史を、過去（とりわけ、それが生まれたルネサンス期）へと遡って明らかにすること。
- 三、以上の二点に基づいて、「永遠の哲学」という概念本

来の用法と、現代におけるそれとを隔てるおよそ四世紀の間に、同概念の宗教的な意味内容がどのように変化して来たのかを明確にすること。

### 一、永遠の哲学派の根本的主張

永遠の哲学派はその始まりにおいて、その主張に関するコンセンサスを有していた。このコンセンサスは今日もは存在していないのだが、それにも関わらず、彼らによつて広く受け入れられるいくつかの主張を見出すことが出来る。筆者は、永遠の哲学派の思想に関して広範に論じるS・H・ナールの二つの論文に基づいて、同学派のそういった主張を要約してみたい。

#### 一・一、伝統

永遠の哲学派において「伝統」という言葉がもつ意味合いは、その一般的な用法と大きく異なっている。彼らにとつての伝統とは、その起源が何でもいような単なる習慣やしきたり、あるいは、特定の思想ないし行為の歴史的な継続性を意味する言葉ではない。それは、預言者やアヴァターラ、ロゴスなどを通じて人間へと啓示された、神的な起源をもつ真理ないし諸原理のことを意味している。さらにまた、そうし

た諸原理の様々な領域（社会構造や芸術、シンボリズム、様々な伝統的な術など）に対する応用までもが、この言葉の内に含まれているのである。以上のように理解された伝統はまた、こうした神的諸原理の覚知と、そこへと到達するための手段を特に重要視している。

## 一・二・永遠の哲学

永遠の哲学派において、概念としての「永遠の哲学」(philosophia perennis) は次のように理解されている。すなわち、それはかつて常に在ったし、またこれからも常に在り続けるであろう知恵なのである。言い換えるなら、この知恵は、始まりをもたず、また様々に異なった表現において、それ自体として変わることはない形而上学的な真理を意味している。そして、こうした真理あるいは知恵を歴史上のあらゆる時代における文書と同様に、口承伝統の中にも見出すことが出来るのだと彼らは主張する。この知恵はあらゆる正統的ないし伝統的な諸宗教の核心に宿っている、永遠にして不變の真理そのものであって、様々に異なった文化や時代における人々の間に存在しているという点でも、また普遍的な原理を取り扱っているという点でも、普遍的な性質を有していると言える。この知恵はまた、二つの手段——すなわち、一つはいわば「横」の伝達（口頭伝承や書物を通じての伝達）、

もう一つはいわば「縦」の更新（何らかの啓示を通じての更新）——によって永続させられるのであり、人間はそれを啓示によって、あるいは知性の照明ないし知的直観によって知ることが出来る<sup>(5)</sup>。

## 一・三・公教（エクソテリズム）と秘教（エソテリズム）

あらゆる宗教の核心に宿り、永遠の哲学派によって「永遠の哲学」および真理そのものと同一視されるこの知恵は、各宗教の内的な意味に相当するものでもある。こうした内的な意味こそが宗教の「秘教的」(エソテリック) な側面と呼ばれるのであり、また、それを通じて宗教が具体的に「生きている」ような外的形式が「公教的」(エクソテリック) な側面に相当するのである。

## 一・四・理性と知性の間の区別

永遠の哲学派にとって、知性と理性の間の区別は根本的なものである。知性による認識の力は、理性による推論の力を超越している。上位の存在状態や超越的な原理を知ることが可能にするものは、こうした知性による認識なのである。「永遠の哲学」と結び付いた諸々の真理は、（啓示に加えて）知的直観を通じてのみ知られ得るとされている。

## 一・五・形而上学

永遠の哲学派にとって、形而上学は知的直観を通じてのみ到達され得る超越的な原理についての「学」である。それはまた、宗教的な教えや儀礼、シンボルなどの意味を照明する知識である。形而上学はまた、諸宗教の多元性が不可欠なものであることを——あるいは、個々の宗教がもつ意義を歪曲することなく他の諸宗教と接触し得るような方法を——理解するための鍵を与えてくれる。以上のように理解される形而上学は、合理主義的な哲学の一分派としての形而上学からは厳密に区別される。

## 一・六・諸宗教の超越的な一致および、諸宗教の

### 現実的な諸形態における多元性

諸宗教の一致ないしそれらの同一性は、究極の实在性——すなわち、それが同時に真理であり、またあらゆる啓示や宗教の起源でもあるような实在性——においてのみ見出され得る。だからこそ、この一致は「超越的」であると言われるのである。究極の实在性のレベルにおいてのみ、諸宗教の様々な教えは同一であり得る。このレベルに至らない限り、諸宗教の間には最も深い対応関係こそ見られるものの、同一性は存在しない。様々な諸宗教は、あたかも多くの言語のようである。それらは様々な文化世界の中で自らが顕現している、

同一にして唯一の真理について語ってはいるのだが、そうした諸言語の文法は同じものではないのである。だから諸宗教の超越的な一致へと到達するためには、現にある宗教の様々な形態を超えて、それらが表しているような唯一の真理を覚知しなければならぬ。永遠の哲学派は、ある種の還元主義に反対する。すなわち、諸宗教の一致を、具体的に存在しているレベルにおけるそれらの共通点に見出そうとし、そうすることで多種多様な伝統を最低限の共通分母へと引き下げてしまうような還元主義に。諸宗教の核心に上述したような知恵と真理が常に存在しているからといって、個々の宗教伝統の特有性と、それらの存在理由とを無視してしまうことは出来ない——永遠の哲学派は、このように主張しているのである。

## 一・七・大進化の否定

永遠の哲学派は、種が常に生起する新しい環境に適應する過程としての小進化を当然のこととして認めているが、一方で大進化を否定する。この否定とはすなわち、上位のものから下位のものから引き出そうとする、大進化に基づいたイデオロギーに対しての反対を意味している。彼らは哲学上の根本的原理として、上位のものは下位のものから発することがないのだと主張して止まない。しかし大進化を否定するからと

いって、彼らは聖書が述べる文字通りの「創造説」を擁護するわけではない。というのも、永遠の哲学派にとっては宇宙生成の過程について考える上で、他の可能性が存在しているからである。

#### 一・八・宗教に対する非還元主義的なアプローチ

永遠の哲学派は非還元主義的な根底に基づいて宗教を研究しなければならずと主張している。すなわち、宗教の意義は心理学や社会学、歴史学、政治学あるいは同様の諸現象に還元することが出来ないというわけである。

#### 一・九・永遠の真理を、現代の言葉で改めて

##### 述べることの必要性

永遠の哲学派を支持する人々が書いた書物の中には、以前に言われたことや過去に述べられた知恵と完全に異なっている、という近代的な意味合いでの「独自性」が存在しない。しかし、伝統的な真理や知恵はそれが理解され得るように、現代の言葉で新たに述べられなければならない。こうした理解を得ることこそが、永遠の哲学派の主要な意図なのである。

永遠の哲学派が、最後の三つを除いて自分の主張は様々な

伝統における文献によって十分に支えられていると信念をもつてよく述べている。本稿の続きにおける文献についてもそう言えるが、まず以下、この信念を表す三つの実例を挙げることにする。

一番目の例は、プルタルコス（四五―一二〇）の『イシスとオシリス』の一部である。それは「永遠の哲学」という思想を表すものであると十分に考えられる。

……この教説は非常に古くからのもので、予言者や立法家たちから詩人や哲学者たちへと流れ、その起源がどこにあるかはわからないものの、説得力は強くて消去し難い。また、著作や言い伝えのなかだけでなく密儀や供儀のなかにもあつて、しかも非ギリシア民とギリシア民とを問わず広範な地方に行きわたっている。そしてこの教説によると、万有は理性も理法もなく舵取り役もなしに、ひとりでに宙に浮いているものではない。

……わたしたちは、神を祀る族民が相異なればそれに応じて神も異なるとは見なさず、非ギリシア民の神とギリシア民の神、南方の神と北方の神があるとも思わない。そうではなく、たとえば太陽、月、天空、大地、海はすべての人間に共通であるのに、族民の違いに応じてさまざまな名がついている。そしてこれとおなじく、今あげ

たものをひとつの理法が秩序づけひとつの撰理が支配し、その下で働く諸力が万物に配される。

二番目の例は、プロティノスの『エネアデス』(V、1、8)の引用である。それは、永遠の哲学派にとって伝統文献が基本的に「新しい」ことを述べないという主張に関連する実例である。

したがってプラトンは、善から知性が出、知性からたましいが出ていることを知っていたわけである。また実際、われわれがここに説いていることは別に新しいことではないのであつて、今ならぬ昔においてすでに言われたことなのである。ただそれはすっかり明けひろげても言われなかつたので、今ここに説かれているようなものが、その解説として出てきたわけなのであるが、ここに説かれている思想そのものが昔からあつたということに関しては、プラトンその人の書物が証拠となつて、われわれの説くところに保証を与えてくれるのである。

第三目の例は、ユヌス・エムレ(?)—(一三二〇)という偉大なトルコ人のスーフィーの神秘的な詩から的一部である。それはいわば「諸宗教の根源的一致」という思想の一つ

の例証であると見なすことができるであろう。

われわれは(靈的)実現化の家に入った、  
われわれは身体を目撃した。

旋回する空を、何層にも重なり合つた地を、  
七万枚のヴェールを、

われわれは身体の中に発見した。  
夜と昼を、惑星たちを、

聖なる板に刻まれた言葉を、  
モーゼがよじ登つたあの丘を、あの神殿を、

イスラーフィールのトランペットを、われわれは身体の中に見聞きした。

トローラー、詩編、福音書、コーラン——

これらの書が語るべきことを、  
われわれは身体の中に発見した。

二、「永遠の哲学」という概念およびそれに相当する

表現の歴史的概観

すでに指摘したように、「永遠の哲学」という用語は永遠の哲学派だけでなく、他の多くの思想家や思想上の流派によつても採り入れられ、各自がこの用語に対し独特の解釈を

行ってきた。その中にはたとえば、一般のスコラ学やネオ・トミズム、カトリック哲学、西洋哲学などが含まれている。<sup>(10)</sup>

「永遠の哲学」という用語に与えられた意味の多様性を考慮するならば——また、それが一体どのように変化してきたかを知るためにも——その用語の起源および黎明期の歴史について考察することは有益であるように思われる。

上述したように、「永遠の哲学」(philosophia perennis)という用語が初めて登場したのは、アゴステイノ・ステウコ(一四九七—一五四八)が一五四〇年に出版した、『永遠の哲学について』(De perenni philosophia)という書物の題名においてであったようだ。彼はギリシア語とヘブライ語に加えて、アラビア語、アラム語、シリア語、エチオピア語を知っており、またヴァチカン図書館の司書をしていたため、(当時の西洋において可能であった限りの)様々な伝統の知恵に触れることが出来たのである。哲学と宗教を永遠なる知恵として総合する際に、ステウコは永遠なるものと見なされる知恵についての、すでに十分発達していた哲学的伝統から多くを汲み取った。この伝統を代表する思想家としては、まず主としてマルシリオ・フィチーノ(一四三三—一四九九)とジョバンニ・ピコ・デラ・ミランドラ(一四六二—一四九四)が、さらに、より少ない程度においてはではあるが、ニコラウス・クザヌス(一四〇〇—一四六四)が挙げられる。「永遠の

哲学」の歴史について考察する上で真つ先に取り掛かるべきなのは、こうした思想家たちである。

## 二. 一. マルシリオ・フィチーノ

フィレンツェに創立されたプラトン・アカデミーの中心人物であり、プラトンやプロティノス、あるいは他のネオ・プラトニストたちの翻訳者でもあるフィチーノだが、彼はまたルクレティウスやヤンブリコス、アウグスティヌス、プロクロス、ディオニュシオス・アレオパギテス、プレトンなどといった哲学者たちによつて、さらには『ヘルメス文書』や「カルデア神託」、『オルフェウス賛歌』などを含む多様な文献によつても著しい影響を受けた。フィチーノは「永遠の哲学」という言葉を用いていないが、その代わりにしばしば「古代の尊ぶべき哲学」(prisca philosophia)、「古代の尊ぶべき神学」(prisca theologia)、あるいは「古代の尊ぶべき人々の哲学」(philosophia priscorum)などを用いている。

フィチーノ以前には、ビザンツ帝国の哲学者であるゲミストス・プレトン(一三五五頃—一四五二—一四五四)が「真の哲学」(vera philosophia)について書き、ゾロアスターを神聖にして原初的な知恵の創始者であると見なしていた。プレトンに従つて、フィチーノはこの原初的な知恵の起源が、『ヘルメス文書』ならびに「カルデア神託」(フィチーノの考

えでは、ゾロアスターがそれを書いたのだという)の中に隠されていると考えた。一方、彼は真理の源泉はただ一つであり、そこから哲学および神学という互いに並行した二つの潮流が、それぞれの歴史の中へと流れ出して来たのであると主張する。彼の信じるところによれば、「真の哲学」(vera philosophia)とはプラトニズムのことであり、プラトンこそが前述した原初的知恵の継承者であると見なされる。そして、「真の神学」(vera theologia)とはキリスト教のことである。

しかし、この「真の哲学」は彼にとつて宗教であり、また「真の宗教」は哲学である。これら二つの真理の形式は、最終的に一つに接続される。なぜならば、フィチーノは他の多くのキリスト教的プラトニストたちと同様、プラトンがモーセの五書を知っており、「ギリシア語を話すモーセ」であつたと信じていたからである。

しかしながら、「古代の尊ぶべき神学者たち」(prisci theologi)——すなわち、ゾロアスター、ヘルメス・トリスメギストス、オルフェウス、アグラオフェムス(ピタゴラスにオルフェウス教を教えた人物であるとされる)、そしてピタゴラスといった人々——から順に、モーセ、プラトン、ネオ・プラトニストへと伝えられた哲学的・宗教的な伝統が永久不変のものであるという考え方は、その起源をフィチーノに帰し得るものではない。すでに古代から、他の多くの思想家た

ちが——とりわけ、初期キリスト教徒と並んでネオ・プラトニストたちが——同じことを主張していたのである。

## 二・二・ジョヴァンニ・ピコ

哲学的な真理の総体を形作るために、ジョヴァンニ・ピコもまた広範囲にわたる過去の哲学および神学から多くを汲み取った。彼にとつて真理はある特定の哲学的ないし神学的な伝統に限定されるものではなく、あらゆる諸伝統は、真理に与る何らかのものを有している。フィチーノが「古代の尊ぶべき神学」の源泉であると考えた非キリスト教的な源泉——とりわけ古代ギリシアやエジプトのそれ——に、ピコはコランやイスラム哲学、カバラなどを付け加えている。ピコはフィチーノが示した見解に従つたが、多様な文明や歴史上の時代を通じ、本質的に唯一のものである知恵の連続性、という観念をより一層強調した。

ピコはまた、あらゆる思想家に対して同等の敬意を払つていたように思われる。彼は、そうした思想家たちの著書の中に自分で見出した真理によつてのみ導かれていたのである。だが一方で、もしもそれらの間に解決し難い相違が見出されるような場合には、他の伝統がプラトニズムの權威に屈服すべきだと考えてもいた。いずれにせよ、彼は多様な哲学的・宗教的諸伝統の全てに対し、一致をもたらしたいと強く願つ



ていた。<sup>15)</sup>

## 二・三・ニコラウス・クザールヌス

ニコラウス・クザールヌスが行った、様々な宗教的諸伝統の間に和解を促そうとする試みは、目的の上でフィチーノやピコが行った試みとは多少異なっているが、ある程度それらに類似したものである。『信仰の平和』(De pace fidei) (1453) は、様々な民族に属し、また様々な宗教を信仰する代表者たち同士の対話について論じられた書物であるが、そこでは次のような信念にその基礎が置かれている。すなわち、諸宗教の間にはそれらを永続する平和へと導くような、ある根本的な一致が可能であるに違いない、という信念に。

この一致の根拠は、神的な原理と人間の本性の唯一性にある、とクザールヌスは述べている。この点で彼は「永遠の哲学」の信奉者である。現にある諸宗教間の様々な差異は、その原因をただ歴史や習慣、儀礼などの相違にのみ帰されることになる、と彼は考える。たとえクザールヌスがキリスト教の優位性を確信しているのだとしても、同時に彼はまた、人々が「諸宗教間の理性的な一致」に到達し得ると確信しているものである。こうした考えによって、宗教戦争や宗教的狂信はその存在理由を完全に取り去られるのであり、宗教戦争の唯一の解決策は、相互の尊重および寛容ということになる。ま

さにこの点こそ、彼の主張がもつ重要な意義なのである。なお、同書においてクザールヌスは「永遠の哲学」と直接に結び付いているもう一つの重要な考え——すなわち、知恵の唯一性——を主張しているのだが、この点に関しては後述する。

## 二・四・アゴステイノ・ステウコ

『永遠の哲学』(De perenni philosophia)の中で、ステウコは自らが「古代の尊ぶべき神学」(prisca theologia)という伝統の最も揺るぎない支持者の一人であることを証明した。彼の浩瀚な著書を貫いて流れる主題とは、次のような観念である。すなわち、「多種多様な人々の理性と、彼らの文字による記録の双方が、万物に一つの原理が存在するということ——また従って、この原理に関する同一の知識が常に万人の下に存在してきたということの証である」。以上の理由から、「永遠の哲学」(philosophia perennis) (または、真の宗教的知識)は、人類の起源から存在し続けてきたとさえ言える<sup>16)</sup>。そして「この真の宗教的知識は、神からアダムに手渡された(すなわち、啓示された)ものなのである」<sup>17)</sup>。したがって、この知識は神的な起源をもつ、聖なる知恵である。さらにまた、この真の宗教的知識とは、真の哲学でもある。

実際のところ、ステウコにとって哲学と宗教の間には、フィチーノやネオ・プラトニストたち一般にとってそうで

あつたのと同様、実質的に何の区別も存在しないのである。哲学と宗教は、その理論においては異なっているかもしれないが、両者ともに同じ目的をもっている。「哲学の目的とは神について知ることであり、また、いわば実際に神を見つめることなのである」<sup>19</sup>。言い換えるなら、哲学の目的は宗教のそれと同様、神を觀照し、また神を知ることなのであるが、それは原初の知恵を再び覺知することでもある。ステウコの主張は次のように続いている。すなわち、最初に神から啓示された真理は次第に忘れ去られ、ほとんどの人々にとつて「夢」のようなものへと變つて来てしまつてゐる。それはただ、古代の尊ぶべき神学者たち (prisci theolog) においてのみ、最も十全な形で生き残つていただけなのである。しかし、この真理は原初においてそうであつたのと同じように永遠に存在し続けるがゆえに、人はその歴史的な表現を通じて間接的に、また内的な觀照を通じて直接的に、この真理へと再び到達することが出来る。ステウコの「永遠の哲学」という概念を註解しつつ、シュミットは次のように言う。「ステウコの「永遠の哲学」(philosophia perennis) とは「古代の尊ぶべき神学」(prisca theologia) にはんの少し新たな衣装を纏わせたものに過ぎないことが分かる。……真理はいわば唯一の泉から流れ出るものであるが、しかし多くの異なつた形式によつて表されるのである」<sup>20</sup>。しかし、「古代の尊ぶべき神学」

には、ステウコの「永遠の哲学」が重要な要素を加えた。それはすなわち、常に存在し続けてきた唯一の真理あるいは唯一の知恵は、伝達のみならず、あらゆる時代のあらゆる人々によつて(少なくとも潜在的には) 内的に知られ得るものである。

近代へと至る前に、ライプニッツについて言及しておかなければならないだろう。「永遠の哲学」という概念は、しばしばライプニッツにその端を発するものと考えられてきた。彼は一七一四年に書かれた手紙の中で、「ある種の永遠の哲学」(perennis quaedam Philosophia) という表現を用いているのである。シュミットが解説しているように、ライプニッツは「永遠の哲学」について語りながらも、この概念の作者がステウコであることに明確な形で言及しなかつた、最初の人物であるように思われる。これこそ、彼以降に「永遠の哲学」という概念とステウコの關係が、実質的に消滅してしまつたこと(20)の理由である。

## 二・五 「永遠の哲学」が二十世紀において

用いられている、幾つかの实例

ライプニッツ以降「永遠の哲学」という用語は水面下に潜り、二十世紀の初め頃になつてようやく、様々に異なつた神

学のおよび哲学的な文脈の中に再浮上して来た。それが再び現れたのは、一九三〇年に編纂されたスコラ学文書撰集の題名としてであった。<sup>(2)</sup> スコラ学のある派においては、「永遠の哲学」という言葉は「スコラ学」の同義語として用いられていたのである。またネオ・トミズムのある派は、永遠の哲学とは聖トマスの哲学に等しいと主張しさえした。なぜならば、哲学的な真理の全体性は——すなわち、あらゆる哲学的な問いに対する解答は——聖トマスの著作全体の内に、完全な形で具現化されたものとして見出されるからである。<sup>(3)</sup>

一方、インド人哲学者のS・ラーダクリシュナンは『東洋宗教と西洋思想』の中で、「永遠の哲学」(その言葉を用いることはないが)的な観点に立つて西洋哲学に加え東洋哲学をも扱うという、彼の哲学的アプローチについての雄弁な説明を行っている。<sup>(4)</sup> しかし、ラーダクリシュナンのアプローチは明確な基準を欠いており、したがって彼は(たとえば)ウパニシャッドと西洋の実存主義との間に深い親和性を見出すことに、何の困難も感じていなかった。<sup>(5)</sup>

「永遠の哲学」が用いられている実例の中で、筆者が最後に挙げるのはアルドゥス・ハクスリーのものである。ハクスリーは『永遠の哲学』(一九四五)という題名が冠された彼のベストセラーによって、この用語を一躍有名にした。<sup>(6)</sup> 彼によるアプローチが外見上、永遠の哲学派に近いものであるよう

に見えるとしても、彼をその学派の支持者であると見なすことは出来ない。

以上に挙げたものの他にも、哲学に属するような領域で「永遠の哲学」という概念が用いられている、若干の例が存在する。しかし、こうした現代における哲学的な諸動向の掲げる主張は、宗教学の領域からはあまりにも懸け離れたものであるため、筆者はそれが歴史的に存在している、という事実に対して言及するのみに留めたい。<sup>(7)</sup>

### 三、「永遠の哲学」という概念の宗教的意義の永続性と変化

前章では、フィチーノやピコ、ステウコらが「永遠の哲学」(philosophia perennis)を——あるいは、その類義概念である「古代の尊ぶべき哲学」(prisca philosophia)や「古代の尊ぶべき人々の哲学」(philosophia priscorum)、「古代の尊ぶべき神学」(prisca theologia)、「真の哲学」(vera philosophia)、「真の知恵」(vera sapientia)、「真の神学」(vera theologia)などを——どのように理解していたかについて、簡単な概観を行った。こうした説明はむろん限定的なものではあるのだが、しかし私たちはそこから、いくつかの結論を引き出すことが出来る。

フィチーノが語る「古代の尊ぶべき哲学」ないし「真の哲学」とは、古代地中海世界——すなわちエジプト、中東、ギリシア、ローマと結び付いたものであった。それはプラトンやネオ・プラトニストたちの知恵なのであり、「古代の尊ぶべき神学者たち」にその源流を求めることが出来る。そしてモーセの啓示の完成であり、「真の神学」でもあるキリスト教の知恵は、「真の哲学」の知恵と本質的に異なるわけではなく、それが異なつた仕方で表現されているだけなのである。

筆者は、フィチーノがその思想を様々な思想家たちから汲み取つたことについて言及したが、その中にはアウグスティヌスも含まれていた。フィチーノは、アウグスティヌスが永遠の哲学に似た文脈の中で用いている「真の宗教」(vera religio)、「永遠の知恵」(aeterna sapientia) および「創られたのではない知恵」(sapientia non fit) などという有名な言葉を知つていたし、その影響もある程度受けていたと想定することが可能だろう。本稿の主題と密接に関連するような意味合いでアウグスティヌスがこれらの言葉を用いている文章を、以下に引用してみよう。

というのも、今キリスト教と呼ばれているそのもの自体は、古代の人々の下にも存在していたのであり、人類の始めからキリストが肉において来たりたもうたその時まで

で、存在しなかつたということはないのである。そしてキリストが肉において来たりたもうたその時から、既に存在していた真の宗教は、キリストの宗教と呼ばれるようになったのである(『再考録』I, xiii, 3)。

知恵そのものは創られたのではなく、むしろかつて在つたように今も在り、そして常に在ることだろう(『告白』IX, x, 24)。

アウグスティヌスが語る「創られたのではない知恵」とは、「人間によつて創られたのではない」知恵に他ならない。したがつて、それは神的な知恵である。そして、もしもこの知恵が知られ得るとすれば、それはある種の啓示によつてのみ可能なのである。なお、フィチーノにとつて永遠の知恵はプラトニズム(それに先行するものも含まれる)およびキリスト教という二つの源泉に帰されるのに対し、アウグスティヌスにとつては「創られたのではない知恵」も「真の宗教」も、特定の伝統に委ねられるものではない。それらは両者とも、原則的に「人類」それ自体へと与えられたものなのである。この点には、特に注意が払われなければならないだろう。

ピコにとつて永遠の知恵の世界とは、フィチーノと同じく古代世界のことを指す。しかし、目新しく独自でもあるのは、フィチーノの想定したような永遠の知恵の源泉(およ

び、その後継者たち全て)に、ピコがコーランやイスラム哲学、カバラを付け加えているという点である。彼の生きた時代や環境を考慮するなら、この点もまた注目に値すると思われる。さらに、ピコはアウグスティヌスと同様、あらゆる文化および時代のうちに、原則的として唯一の知恵が存在していなければならぬと考えていた。

ステウコが永遠の哲学に関して述べた思想の内には、フィチーノのそれに見出された要素の全てが含まれている。しかし、そこには他の思想家に類を見ないほど明瞭に語られた、次のような二つの観念が存在する。

一、原初の知恵が神自身によってアダム、すなわち人間へと啓示された。

二、時が経つに連れて、この知恵は次第に忘れられて行く。しかし、それはいかなる時代にも、またいかなる人によっても、神を知ること(すなわち、神の観照)を通じて再び発見され得る。

なお、ステウコは永遠の知恵の唯一性について、その根拠を原理の唯一性に求めている。神ないし原理は唯一であるがゆえに、知恵は唯一であって、宗教伝統や民族を問わず、人々はみな最終的に同じ唯一の神を信仰している——こうした説はステウコに先立ち、すでに指摘した通りクザーヌスによって『信仰と平和』の内(4, 10, 11, 17, 68)で述べら

れていた。クザーヌスはキリスト、聖ペトロ、聖パウロと様々な民族の代表者の会話を想像して自分の考えを述べる。

これらの派遣された者たち全体を代表してある首位者が述べた。

「主よ、あなたは様々な民族に様々な予言者と教師を派遣されてきておられ、それもあるものにはあるときに、ほかのものにはほかのときに派遣されています。……〔しかし〕ある共同体が自らの信仰を他に対して優先させれば、少なからぬ論争が生じるのです。」

御言葉

「別の信仰ではなく、同じ唯一の信仰がいたるところに前提されているのを、汝らは見出すであろう。……」

「ただ一つの知恵だけが存在しうるのである。なぜなら、たとえ知恵が複数存在することが可能であるとしても、それらは一なる知恵に由来して存在しているのが必然的であるのだから。なぜなら、あらゆる複数性に先立って一性が存在するのである。……」

「これまで複数の神々を祀ってきた者はすべて、神性というものが存在することを前提してきている。……また複数の神々の存在を説く人は、それらすべての神々に先行して存在する一なる根源の存在を説いていることにな

る。……いかなる種族も、複数の神々が存在する場合、それらのいずれもが、第一原因、根源あるいは宇宙の創造者であると信じるほどに愚かであったことはない。」……

こうして、諸国民の知者たちとともに以上のことが考察された後に、昔の人々の宗教的戒律について記された書物がたくさん提示された。……集められたすべての書物から明らかに明らになったことは、そもそもの始めから万人が唯一の神を常に前提していたのであり、またあらゆる祭式において彼「唯一の神」を崇拜していたという事実である。

知恵の唯一性に関して、クザーヌスは「あらゆる複数性に先立って一性が存在する」と説明するのみに止まっており、彼の影響を受けたにせよ、ステウコの方がそれについての説明をより深く掘り下げ、またより広く展開し得ている。いずれにせよ、この問題に関するステウコの主張は、次のような重大な思考として帰結することになった。すなわち、知恵の唯一性であれ永遠の哲学であれ、人はそれらの存在を帰納的推論によってではなく演繹的推論によって——つまり、多様な諸伝統の内に類似した真理（知恵）が存在すると確認することによってではなく、この真理が原理の唯一性の結果とし

て必然的に存在していなければならないと措定することによって——確信するに至るのである。そして、多様な諸伝統の内に見出される諸々の類似は、ただ知恵の唯一性や永遠の哲学が存在することを裏付けるのみである。

以上の考察から、アゴステイノ・ステウコによる「永遠の哲学」という概念の理解が、先行する思想家たちの諸観念を多く採り入れつつ作り上げられた非常に精巧なものであって、深いニュアンスに富んでいることが十分に明らかになったのではないだろうか。彼の同概念について、その要点を以下のようにとめることができる。

一、永遠の哲学とは神的事柄に関する知恵であり、たとえ異なる仕方や形態で表現されているとしても、時代や文化を通じて本質的にただ一つである。

二、その唯一性は、それにとつての第一の源泉でもある、唯一の原理の存在によって根拠付けられている。

三、原初の啓示以降この知恵は次第に忘れ去られて行くのだが、にもかかわらず、それはいつでも、また誰によつても、それにとつてのもう一つの源泉である観照を通じて再度明らかにされ、また認識され得る。

仮に今、自らの哲学を特徴付けるために「永遠の哲学」という言葉を用いた二十世紀における様々な思想家や学派について振り返るのであれば、上で述べたステウコ的な概念の要

点にもつとも近いものは、永遠の哲学派である。すでに見た通り、彼らの主な主張はステウコによる主張を大きく超えていながらも、それを自らの中心思想として包含している。両者の相違に目を向けるならば、最も際立っているのは以下のような点だろう。

一、現代における永遠の哲学派は「永遠の哲学」という概念に対し、実際に普遍的な意味を付与している。すなわち、彼らは永遠の哲学の領域を、ステウコの言うようにただ原則のみに置いて「あらゆる時代、あらゆる場所」へと拡大するだけでなく、歴史上のほぼ全ての伝統に関する今日の知識のおかげで、文字通り「あらゆる時代、あらゆる場所」へと拡大するのである。

二、現代では様々な諸伝統におけるテクストについての、ルネサンス期とは比較にならないほど優れた知識や文献学的な批判研究に基づいて、ステウコや彼の同時代における思想家たちが犯した誤りを回避することができるといったようになった。

三、大進化の否定や宗教に対する非還元主義的アプローチといった、現代における永遠の哲学派の主張のいくつかは、ルネサンス期にはいかなる存在理由も有していなかった。

四、永遠の哲学派は、ルネサンス期の思想家や哲学者たち

がカトリシズムによつて強いられたような、自らの考えを世に出す際の諸々の制約から自由である。

以上の説明からも分かる通り、こうした相違点が存在するのも、ルネサンス期から現代へと至る時間の流れは、当然にも「永遠の哲学」という概念の意味内容に影響を与えてきたからである。

結論を言うなら、これら全ての相違にもかかわらず、永遠の哲学派はステウコが用いた意味での「永遠の哲学」という概念の正当な後継者であると言える。数世紀にわたる凋落にもかかわらず、アゴステイノ・ステウコがその「父」であると見なされる「永遠の哲学」という概念は、現代の永遠の哲学派において、新たな衣装を身に纏い甦ったとも言い得るのである。

## 注

(1) Charles B. Schmitt, "Perennial Philosophy: From Agostino Steuco to Leibniz", *Journal of the History of Ideas*, Vol. 27/4 (Oct.-Dec. 1966): 505-532; p. 505. 筆者は「永遠の哲学」に関しての歴史的資料について、この論文に大変助けられたという。この論文は四十年以上前に書かれたものであるが、現在でもこの主題の主要な典拠となっている。しかし、この論文の著者が永遠の哲学派について触れていないということは、指摘しておく必要がある。

(2) Mark Sedgwick, *Against the Modern World: Traditionalism and*

*The Secret Intellectual History of the Twentieth Century* (Oxford University Press, 2004); L. E. Hahn, R. E. Auxier, & L. W. Stone, ed., *The Library of Living Philosophers Vol. 28. The Philosophy of Seyyed Hossein Nasr* (Chicago: Open Court, 2001); Carl W. Ernst, "Traditionalism, the Perennial Philosophy and Islamic Studies," *Middle East Studies Association Bulletin*, Vol. 28/2 (December 1994): 176-180; Huston Smith, "Is There a Perennial Philosophy?", *Journal of the American Academy of Religion*, Vol. 55/3 (Fall 1987): 553-566; M. Eliaade, "Ananda K. Coomaraswamy et Henry Corbin: à propos de la Theosophia perennis", in *Briser le toit de la maison* (Gallimard, 1985 [1979]), pp. 281-294.

(3) アメリカにおける最も権威のある宗教学者の一人であるロマーモン・ストーン (Huston Smith) がその好例の一つである。L. E. Hahn, R. E. Auxier, & L. W. Stone, ed., *The Library of Living Philosophers Vol. 28. The Philosophy of Seyyed Hossein Nasr* (Chicago: Open Court, 2001), p. 139.

(4) 日本における宗教学の分野におけるこの主題への関心の証拠として中村廣治郎氏の「日本宗教学会第67回學術学会の「フリッチョフ・シントンの宗教一元論」の発表と「日本宗教学会第68回學術学会の「フリッチョフ・シントンの井筒俊彦」の発表がある。

(5) S. H. Nasr, "The Philosophia Perennis and the Study of Religion," in Frank Whaling, ed., *The World's Traditions - Current Perspectives in Religious Studies - Essays in honour of Wilfred Cantwell Smith* (Edinburgh, T. & T. Clark, 1984), pp. 181-200; S. H. Nasr, "What is Tradition," in *Knowledge and the Sacred* (State University of New York Press, 1989), pp. 65-92.

(6) 西洋世界における「永遠の哲学」として知られるものの知恵の「ムジャズ」にペルシャ語教徒たちは「サナターナ・ダルム」(*sanātana dharma*) と呼び、またイスラーム教徒たちは「ムル・ヒタマター・ムル

クノリダー」(*al-hikmah al khaliqah*) (ペルシアでは「シャールウィーダーン・クハラマ」(*javān kharrad*)) と呼ぶのである。"Sanātana dharmā cannot be translated exactly, although *sophia perennis* is perhaps the closest to it since *sanātana* means *perennity* and *dharmā*, through one of its senses, is related to sacred knowledge, especially if the realized and not only the theoretical dimension of this knowledge is taken into consideration" (S. H. Nasr, "What is Tradition", note 6, p. 87). *Al-hikmah al khaliqah* or *javān kharrad* in Persian is indeed translated as "the eternal wisdom" by Henry Corbin (*Histoire de la philosophie islamique* (Gallimard, 1964), p. 248).

(7) プルトルロス「イシスとオシリス」、『エネアデス』 神代地誌』飯尾節人訳、龍溪書舎一九九九年、六〇七―六〇八、六二四頁。

(8) プロテイノス「エネアデス」(ア、1、8)、『プロテイノス全集第三巻』田中美知太郎・水地宗明・田之頭安彦訳、中央公論社一九八七年、二八三頁。この引用を註解して「ユエール・ヌーが次のように述べている。「古代の文学史料は、近代の著作とは非常に異なったものである。……〔近代の〕著者は独創性を決して誰も言ったことではないことを探し求めている。哲学者は彼の体系を提示し、独自の仕方て叙述し、自由にその作品の構造を決定する。……あらゆる点で彼は、彼固有の特徴を印そうと努めるのである。古代末期のすべての著作と同様に、『エネアデス』はまったく他の束縛を脱けてくる。しかし彼は独創性は一つの欠点であり、革新は疑われないのである。』(Pierre Hadot, *Plotin ou la simplicité du regard*, Gallimard, 1997, p. 14.)

(9) Yunus Emre, *The Drop that Became the Sea, Lyric Poems by Yunus Emre*, trans. from Turkish by Kabir Helminsky and Refik Algan (Boston London: Threshold Books, 2000), p. 20.

(10) Charles B. Schmitt, "Perennial Philosophy", p. 505.



- (11) *Ibid.*, p. 508.
- (12) *Ibid.*
- (13) D. P. Walker, "Orpheus the Theologian and Renaissance Platonists", *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, Vol. 16 (The Warburg Institute University of London, 1953, Kraus Reprint 1970): 100-120; D. P. Walker, "The *Prisca Theologia* in France", *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, Vol. 17 (The Warburg Institute University of London, 1954, Kraus Reprint 1970): 204-259.
- (14) Charles B. Schmitt, "Perennial Philosophy", pp. 509-511.
- (15) *Ibid.*, p. 512-513.
- (16) *Augustinus Stenchnus, De perenni philosophia* (New York London: Johnson Reprint, 1972), I, 1; fol.1<sup>r</sup>; X, 1; fol. 561-562, Introduction by Charles B. Schmitt, p. xi.
- (17) *De per phil.*, I, 1; fol 1<sup>r</sup>.
- (18) Charles B. Schmitt, "Perennial Philosophy", p. 520.
- (19) *Ibid.*, p. 520.
- (20) *Ibid.*, p. 532.
- (21) Leroy E. Loemker, "Perennial Philosophy", in *Dictionary of the History of Ideas*, Philip P. Wiener, ed. (New York: Charles Scribner's Sons, 1973), Vol. III, p. 458. *Philosophia Perennis*, Fritz-Joachim von Rintelen, ed. (Regensburg: Habel, 1930).
- (22) James Collins, "The Problem of a Perennial Philosophy", in *Crossroads in Philosophy: Existentialism, Naturalism, Theistic Realism* (Chicago: Henry Regnery, 1962), pp. 256-257.
- (23) S. Radhakrishnan, *Eastern Religions and Western Thought* (Oxford University Press, 1974 [1939]).
- (24) James Collins, *op. cit.*, p. 266.
- (25) Aldous Huxley, *The Perennial Philosophy* (New York: Harper & Row, 1945).
- (26) James Collins, *op. cit.*, pp. 260-266.
- (27) Bibliothèque Augustinienne, *Œuvres de saint Augustin*, v. 12, *Les révisions*, texte de l'édition bénédictine, intr. trad. et notes G. Bardy, Desclée de Brouver, Paris 1950. 山田庄太郎 (筑波大学哲学・思想専攻大学院生) 訳。
- (28) Bibliothèque Augustinienne, *Œuvres de saint Augustin*, v. 13-14, *Les confessions*, I. Livres I-VII, II. Livres VIII-XIII, texte de l'édition de M. Skutella, intr. et notes A. Solignac, trad. E. Tréhorrel et G. Bouïsson, Desclée de Brouver, Paris 1962. 山田庄太郎 (筑波大学哲学・思想専攻大学院生) 訳。
- (29) ニコラウス・クザリヌス 『信仰の平和』八巻和彦訳 『中世思想原典集成17 中世末期の神秘思想』平凡社 一九九二：五八六、五九〇、五九一、五九五頁。

(リアナ・トルファシユ 筑波大学)